FD 活動の報告

尾　崎　明　人

日本語日本文化教育部門は平成14年に FD 班を設け，教員全員で FD 活動に取り組んできた。平成16年には，留学生センターの委員会として FD 委員会を設置し，教員個々の授業改善，教授技術の向上をめざしている。

平成17年度は FD 委員会を３回開催した他，教員が自由に話し合う場として FD 懇談会を２回開いた。懇談会では実践報告をもとに話し合う機会も設けた。また，昨年同様，FD 報告書を作成した。

⑴　FD 懇談会

２回開催した FD 懇談会で出された意見，論点の一部を以下に列記する。

・FD 活動は，教師としての資質・能力を高めることが目的であるから，各自が目標を設定し，それに向けた努力とその成果を自己評価し，さらに工夫を重ねていくというものである。したがって，FD 活動は教員個々の仕事である。だが，一方において，FD 活動はセンターの教育研究活動の一部であり，外部評価の項目にも含まれる事柄であるから，センターとしての FD 活動を記録に残し，センターとしての自己評価を行わねばならない。

・センターとしての FD 活動にはさまざまな方法が考えられる。教員一人一人が FD 報告を書くだけでなく，FD 活動に関する懇談会，勉強会，講演会などを計画的に実施すれば，それはセンターの FD 活動であり，自己評価の対象になる。

・授業改善のための課題を設定する場合，すでにそのような課題に取り組んだ事例があるかもしれない。授業の工夫についても先例があり得る。したがって，課題解決に必要な情報や事例を集め，教員が情報を共有することもセンターとして考えるべき課題である。

・これまでの FD 報告は，教え方（教授法）に着目したものが多いが，教える内容の改善を目指す取り組みも FD 活動に含めて考えていい。また，教材開発の過程で学ぶことも多いので，教材開発を FD の視点から見ることもできる。

このような意見が出される一方，より本質的な議論も行われた。「学生が満足すれば，いい授業と言えるのか」「いい授業とはどのような授業か」という議論である。「FD 活動は学生の学習成果に結びついていかなければ，意味がない」,「授業が楽しいというだけでは不十分。何らかの成果がなければならない。さらに勉強を続けよう，もっと高いレベルを目指そうと学生が思うような授業はいい授業だ」,「学習成果とは何か。単に日本語の能力が伸びたということだけではなく，学習能力を高めること，自律的な学習ができるようになることが大事だ」などの意見が出された。この議論は，学習の成果をどのように測るかという次の問題ともつながっている。

FD 懇談会は，何らかの結論を出すための場ではなく，お互いが日ごろ感じていること，考えていることを話し合う場である。このような話し合いの時間を共有することで FD 活動に対する共通理解が生み出されていると考えられる。

⑵　実践報告

第２回 FD 懇談会で村上教授から配付資料をもとに「Can-do-statements」を利用した授業実践の報告があった。概略は以下の通りである。

学部の日本語科目では，授業開始前と終了後に「何ができるか，できないか」を尋ねるアンケートを行い，受講生に自己評価を求めている。この「Can-do-statements」を利用することで，学生は学習すべき事項を自覚し，自分の進歩や学習の進め方について考える手がかりを得ることができるし，教師の側は，学習者の自己評価を参考にしながら行動面から授業目標を立て，その目標に照らした授業を行うことができる。学生の回答は他のテストなどと相関がかなり高く，授業のやり方や問題点を学生たちと話し合うにはいい材料になる，とのことであった。

この報告に対して，この方法ではコース開始前とコース終了後に具体的な言語コミュニケーション行動

に焦点を当てた自己評価が行われるので，従来の漠然としたコース評価に比べると，アンケートの結果を授業の内容や方法に生かせるのではないか，「Can-do-statements」を作ることがコースを考える出発点になる，などの肯定的な意見が多かったが，一方では，コースによって「Can-do-statements」とそれに沿ったコースを作ることがむずかしい場合もあるという意見があった。

また，村上教授がこのような実践を行っていること自体を知らなかったので，みんなが何をやっているか情報交換をもっとするといいという意見も出された。

⑶ FD 報告書

平成17年度も前年に引き続き，全教員が個人またはグループで FD 報告書を作成した。

その内容は多岐にわたるが，その一部を紹介する。

・「会話練習の実践報告―日本人にインタビューする―」,「会話授業における録音とその生かし方」など，会話の授業に関するもの
・「SJ302読解授業改善の試み」,「全学向日本語講座初級Ⅰクラスの読解授業」など，読解の授業に関するもの
・「全学向日本語講座上級聴解クラス」,「上級作文Ⅰクラスの授業での試み」など，聴解，作文の授業に関するもの
・「ドリル授業の試み」,「初級における漢字ワークシート作成の試み」,「できるだけ学習者を主体とした文法クラスの試み」,「SJ101の数字導入」,「フィードバックシート導入の効果」,「ボランティア参加型授業」など，授業方法に関するもの
・「大量の漢字導入を期待された法学部専門日本語入門コース」,「初級クラスでの携帯メール文の試み」など，授業内容に関するもの
・学部日本語科目や専門入門講義に関する学生からの授業評価に関するもの

これらの FD 報告24編を一つにまとめて，44頁からなる FD 報告書を作成し，教員全員に配布した。

⑷ 総括

国立大学法人化を一つの契機として日本語教育プログラムの大幅な見直しが行われ，本年度から新しい日本語教育プログラムが始まった。この教育改革に備えて，昨年度から読解教材，漢字教材などの作成作業が始まり，今年度も授業と並行して教材作成に多くの時間をとられた。こうした中で内容のある FD 報告を書くことは教員にとって大きな負担であった。

本学の日本語教育プログラムは20名を越える非常勤講師に支えられている。その非常勤講師が全員 FD 報告を書くこと自体，他の教育機関ではあまり見られないことであろう。留学生センターではこれまで日本語教員が一体となって FD 活動を進めてきたのである。しかし，予算の削減にともないクラスの規模が大きくなっていること，プログラム改変にともない新たな作業が増えていることなど，教育環境が大きく変わりつつある。こうした中で，FD 活動を形骸化させることなく，今後も全員で FD 活動に取り組んでいくには，コース運営のあり方や教育条件の改善にも目を向ける必要があるだろう。